

論文

アイリス・マードック再読 —マードックの初期小説における (非)政治性

大道 千穂

キーワード

アイリス・マードック
政治
道徳
1950年代

目次

- はじめに一読まれなくなったマードック
 - マードックと政治
 - 1930年代
 - 1940年代
 - 1950-60年代前半
 - 初期小説における政治性
 - 『網のなか』(1954)
 - その後
 - 結論—日本におけるマードック再読の可能性
- 【注】
【文献】

1. はじめに—読まれなくなったマードック

1954年に処女作『網のなか (*Under the Net*)』を発表すると、ジーン・アイリス・マードック (Jean Iris Murdoch, 1919-1999) は同時代に登場したキングスリー・エイミス (Kingsley Amis, 1922-1995)、ジョン・オズボーン (John Osborne, 1929-1994)、アラン・シリトー (Alan Sillitoe, 1928-2010) ら若い一群の作家たちと並ぶ「怒れる若者たち」(Angry Young Men) の一人として、つまり戦後イギリスの新しい小説の担い手の一人として、一躍注目を浴びた。教科書的にいうならば、「怒れる若者たち」とは反モダニズム、反エスタブリッシュメントという姿勢のみを共有する作家の一群であり、それぞれのバックグラウンドや「怒り」の対象、作家としての方向性はばらばらであった¹。『網のなか』の小説としてのスタイルがモダニズム小説とは大きく異なったこと、また、体制の中で安定した位置を築くことができない若い男性を主人公としたために、マードックも当初はこのグループの一人に数えられたが、哲学的思考をふんだんに盛り込んだ寓話的な作風が階級社会や現実の社会への批判をあらわにする他の作家たちの作風とは大きく異なったこともあり、次第に同列に扱われることはなくなった。たとえばアラン・シリトーの死を受けて、「怒れる若者たち」とは何であったのかについて再考した2010年4月のアレックス・シエルツの記事において、マードックは名前すら言及されていない。

こう書くと、マードックは小説家として正当な評価を受けていなかったように響くかもしれないが、そうではない。むしろ逆である。「一過性の社会現象として安易に一蹴」(楠田 234) されがちであった「怒れる若者たち」の中心人物に数えられてきた作家たちに比べ、マードックは一般的に言ってイギリスにおいて高い評価を受けてきた。オックスフォードで哲学を講じる小説家マードックは、戦後の女性知識人の象徴的存在であり、ニック・ターナーが述べるように、1954年の処女作発表から1980年代半ばまで、彼女はイギリスにおけるもっとも重要な現代作家の一人とみられてきたのである (Turner 35)。日本においてもマードックは熱狂的に受け入れられた。全26作の小説のうち19作までもが翻訳出版されてきたことは、日本におけるマードックの根強い人気を物語っているといえよう。

そのマードックの名前を、日本の一般読者はもちろんのこと、英文学研究者の間でもあまり聞かなくなつて久しい。ターナーが2010年に出版した *Post-War British Women Novelists and the Canon* を読む限りにおいては、本国イギリスでも同様の傾向があるようだ。しかしそうは言っても、2002年にイギリスのキングストン大学にアイリス・マードック・アーカイヴ (Iris Murdoch Archive) を含むアイリス・マードック研究センター (the Centre for Iris Murdoch Studies) が置かれて以降、欧米におけるマードック研究が息を吹き返していることは明白である。マードック生誕100年という記念の年である今年は特に、オックスフォードやアミアン (フランス) など、ヨーロッパ各地で多くの学術的イベントが開催されている。2000年前後から、倫理学というアスペクトから文学を読み直す批評が流行し始めたことも、マードック研究の再燃へとつながったようだ²。

残念ながら、日本ではこのようなマードック研究熱の再燃は今のところ見られない。一時期までの日本におけるマードック人気は世界的にみても高いものであり、イギリス、アメリカ以外の国でアイ

リス・マードックという個人の名前を冠した学会を有するのも、今もって日本だけである。それにもかかわらず、現在日本ではマードックの名前はほとんど知られていないのが現状だ。日本で翻訳が出版されなかった7作のうち5作が1980年代以降の作品であるという事実も（残る2冊は1970年代の作品である）、1980年代以降急激にこの作家の人氣に影が差したことを物語っているといえるだろう。それではなぜ、マードックはかつては日本人に好まれ、今はあまり好まれないのだろうか。

ターナーは1980年代に入ってマードックが現代イギリス文学のキャンソンの中心からはずれていった原因を複数挙げているが、そのひとつに、マードックがフェミニズムとのかかわりに対して消極的であったこと、そしてそれに付随して、多くのフェミニスト・フィクションにおいて顕著である政治性が欠如していたことを挙げている（Turner 53）³。戦後日本における日本のマードック熱を考える際に、この点はひじょうに興味深い。というのも、日本の英文学研究は長らく、政治に関する議論を排除することによって成立してきたからだ⁴。初期マードック作品の日本における高い人氣は、実はここにも原因があるのかもしれない。そして、後期マードック作品の人氣の失墜もまた、同じくここに原因があるとは考えられないだろうか。日本アイリス・マードック学会創設10周年を記念して2008年に出版された『アイリス・マードックを読む—全作品ガイド』の「あとがき」において、当時の会長であった平井杏子もこう述べている。

一時期の熱狂ぶりに比べれば、わが国におけるアイリス・マードック熱には、後半陰りが見えてきたと言ってもさし支えないだろう。理由はわからないではない。作品の随所に織り込まれた、崇高すうこうとも生硬せいこうともいえる宗教や哲学思想に目を奪われがちな私たち読者は、いつしかマードックという作家を、聖女のように世離れした存在と思ひ込み、小説世界に緩あやなすグロテスクで妖艶ようえんでエロスに満ちた人間模様を、マードックの想像の産物、観念の生み出したリアリティの欠如した世界と、頭のどこかで思ひ込みはじめていたのではなかっただろうか。

（下線は筆者による；254）

そのとおりだと思う。しかし反モダニズムの立場に立ち、リアリズム小説の復権を声高に声明して小説家としてのスタートを切ったマードックの作品に、「リアリティが欠如」しているとはどういうことなのだろうか。私たちはマードック作品のどこか根本的な部分を読み落としてはこなかっただろうか。本稿はこのような視点から、マードック再読の可能性を探るものである。第2節ではまず、マードックの政治や社会に対する発言を整理し、彼女の基本的姿勢を明らかにする。続く第3節では1950年代という時代背景を手掛かりに、マードックの初期作品における政治性について考えてみたい。結論部ではそれまでの議論を総括し、日本において、今再び読者がマードックに目を向ける可能性や意義について検討したい。

2. マードックと政治

マードックはアングロ・アイリッシュの両親のもと、1919年にダブリンで生まれた。厚生省に職

を得た父親に連れられて、生まれて数か月後に一家はロンドンに居を移しているが、アイルランドはマードックの両親にとって、そしておそらくは両親とは多少異なる意味においてはあるがマードック自身にとって、生涯にわたり特別な愛着を寄せる故郷であった⁵。マードックの両親は、ともにアイルランド独立までの長きにわたるアイルランドの政情不安を経験しており、父親はさらに、イギリス軍の兵士として第一次世界大戦に従軍している。マードックの両親は否応なく、社会情勢、政治情勢に対して敏感であったと想像できる。そのような両親のもとに育ったことは、マードックの政治意識を早くに目覚めさせたとは考えられないだろうか。室谷洋三、ポール・ハラが編集したマードックのエッセイ集の中には、マードックが十代の頃に執筆したエッセイも収録されているが、そこからは既に、マードックがその後進んでいく方向性が見てとれる。本節では少女時代であった1930年代から小説家としての地位を固める1960年代までのマードックの政治とのかかわりや発言を整理し、マードックの姿勢を明らかにしていく。

1) 1930年代

イギリス移住後のマードックは、文官を務める父のもと、ロンドンで安定した幸せな少女時代を送った。1932年、13歳で入学したブリストルの全寮制の女子校、バドミントン・スクールには、ヒトラーの勢力拡大に伴いドイツ、オーストリア、チェコスロバキアから多くの少女たちが避難して来た。そのためマードックは、比較的早期から強制収容所の存在と状況を知ることになる。ヴァレリー・パートンによれば、バドミントン・スクールの左翼的な思想に強く影響を受けたマードックは、1936年春の時点では既に、「気持ちの上では共産黨員」であったということだ (Purton 7)。バドミントン・スクール時代に彼女がスクール・マガジンに寄せた詩や翻訳、エッセイからは、第二次世界大戦を経験する前、作家としてデビューする以前の彼女の文才や政治思想を垣間見ることができる。

エッセイ「私はいかに国を治めるか (‘How I would Govern the Country’)」は1935年、マードックが16歳の時に書かれた。マードックはまず、それぞれの国民、それぞれの国は固有の特性や性質があり、ある国民に適した統治の方法が別の国民を統治する方法としてもふさわしいということはないと述べている。アフリカのズールー族を例に挙げ、「私たちはこうした不幸な原住民たちのニーズに時としてなんと盲目的なことでしょう！自分たちの流儀を許されたいというただそれだけを望んでいる彼らに、私たちはヨーロッパの服やシルクハットを与えているのです。多くの場合、ほんの少しの思慮分別を持つことで、無用の流血を防ぐことができるのです」 (Murdoch, ‘Govern’ 6)、と指摘する若きマードックは、この時点ではっきりと、帝国主義の問題点を理解している。とはいえ帝国主義の先頭を走ってきたイギリスを否定しているわけではない。イギリスは決して理想国家の域まで達してはいないが、それでもイギリスの立憲君主制はイギリスにおいてよく機能しているとマードックは判断している。理想の国家とは「平等な抑制 (‘equality of restraint’)」 (Murdoch, ‘Govern’ 7) によってひとりひとりの自由が確保される国家であるが、イギリスにおいてはそれがある程度確保されているというのである。現在いくつかの国々が向かっている、「すべてが政府のコントロール下におかれ」 (Murdoch, ‘Govern’ 7)、国家を作り上げるべき多様な個々人の個性を奪ってしまう全体主義のあり

方は、国家の理想からは程遠いと警告している。

翌年に執筆した「もし私が外務大臣なら (‘If I were Foreign Secretary’)」(1936)においても、マードックはファシズムを強く批判している。外務大臣になったら、まずは必要な経済制裁措置をとりつつ市場の安定を図り、国際通貨の取り決めを行って世界情勢を落ち着かせた後で、「侵攻の抑止力」となるよう「いかなる種のものであれ侵略者を即座に追放する条項を導入する」と彼女は述べる。そして、より迅速な制裁行動がとれるよう国際連盟規約第16条の改正を提案するという (Murdoch, ‘Foreign Secretary’ 9)。それだけのことをしてもなおファシスト国家が攻撃的な拡張主義政策をあきらめないのであれば、外務大臣として自分はアメリカ、フランスと手を組んで、新しい第16条の取り決めのもとでもっとも厳しいペナルティを課すしかないと彼女は主張している。10代後半のマードックは、既に明確に反ファシズムの立場に立っていた。

2) 1940年代

1938年にオックスフォード大学サマヴィル・カレッジに進学したマードックが最初にしたことが、共産党への入党であった (Purton 11)。パートンによれば、この頃のマードックにとって、そして彼女の大学の同胞たちにとって、共産党員であるということは、つまり、平和主義者であるということだった (Purton 12)。その後まもなくオックスフォード大学内の労働クラブ (Oxford University Labour Club; OULC) にも所属した彼女は、そのクラブ内ですぐに幹部として活躍するようになる。徴兵制復活反対の会合は、彼女の幹部としての最初の仕事のひとつであった (Purton 12)⁶。大学最終年の1941年にはOULCの議長になり、1942年、卒業と同時に大蔵省で事務の職を得た。母国ハンガリーがソヴィエトにひどい抑圧を受けた恋人トマス・バロウの影響で、1943年末ごろから政治的な共感は徐々に共産党から労働党へと移る。1944年には国連救済復興機関 (UNRRA) の職員になり、戦争末期のロンドン、戦争終結直後のブリュッセルやインスブルック、グラーツといった都市において難民の救援活動に従事した。彼女がイギリスのアカデミックな世界に戻ったのは1947年秋のことであった。

以上みてきたように、1930年代後半からの10年間ほどのマードックは、当時の一般的な女性の状況を考えれば、国際政治において女性が立ちうる限りの最前線に立って活動した稀有な女性であったと言えるだろう。そして彼女が行き着いたところは、UNRRAでさらなるキャリアを積むよりも、アカデミックな世界に戻りたいということだった (Purton 45)。飢えと苦しみにあえぐ多くの人々の救援活動に従事する中で、マードックは言葉の力、つまり書くことによる救済に、より大きな力が宿っていると感じたのではないだろうか。

3) 1950-60年代前半

1948年秋からオックスフォード大学セント・アンズ・カレッジで哲学やラテン語を講じるようになったマードックは、さまざまな学会や協会でも専門分野である哲学に関する論考を精力的に発表する他、哲学や社会問題、文学に関するエッセイを次々と掲載し、そして小説の執筆も本格的に開始した。

『サルトル—ロマンチックな合理主義者 (*Sartre: Romantic Rationalist*)』(1953) と、それに続く処女小説『網のなか』(1954) の出版は、哲学者であり小説家である新しい女性作家として、マードックを強く社会に印象付けた。ここでは彼女が1960年代初頭に発表したいくつかのエッセイをとりあげ、マードックの政治的な発言を整理していきたい。

原子爆弾投下という未曾有の破壊行為を経験した第二次世界大戦後の世界では、非核キャンペーンがさかんに展開された。「道徳と原子力兵器 ('Morality and the Bomb')」(1962) には、この動きに対するマードックの見解が述べられている。マードックによれば、「よきことが生まれるために悪をなすことは許される ('it is permissible to do evil that good may come')」(Murdoch 'Bomb' 2) という前提に立つという点では道徳と政治には共通性があるが、一般的に道徳が個人の心の中の問題である一方で政治は対外的な利己主義と取り決めの問題であり、2つはこれまで別の領域のものであるとされてきた。しかし核兵器という新たな兵器の誕生は、この2つの領域を切り離すことができないものにした。戦争を核戦争という意味でとらえるのであれば、どのような戦争であれ、戦争はよきものを生み出すための道具にはなりえないのだ。そこで出てくるのが、核兵器の使用は、テスト使用ですらも非道徳的であり、核兵器を保有しないことの結果が何であれ、核を保有することは悪であり不適切である、という核軍縮派の意見だ。しかしこれは道徳的には適切だが、政治的議論にはなっていない。「私たちにとっての緊急の課題は、この恐怖をいかに明快で実際的な政策へとつなげていくかということだ」(Murdoch 'Bomb' 4)、とマードックは私たちに語りかける。そして彼女によれば、そのためにはより広い情報の拡散による草の根の道徳意識の成長が欠かせないのである。

As [sic] neither Russia nor America will disarm unilaterally there is politically speaking little point in discussing whether we would wish them to do so if they would. There still exists however an atmosphere and an understanding which make it possible to regard politics as the settlement of conflicts of interest by negotiation. What we need to do is to preserve and cherish that atmosphere while gradually, by every possible means, destroying the old idea, which use to accompany it, that recourse to war is permissible or conceivable. We must make here, as it were, a great new breach through which morality, the decent, sensible morality of ordinary people all over the world, can enter into politics.

This [sic] can be brought about partly by a greater dissemination of information about what nuclear is like. (下線は筆者による；Murdoch, 'Bomb' 4)

SNSを使った草の根の人々の声が政治を動かしていく21世紀の現代の政治の一側面を、マードックはまるでこの時から予見しているかのようなのである。そして彼女によれば、この草の根の動きを先導すべきはイギリスなのだ。

The first and most important *act* which can arrest and challenge the present state of madness

and make sensible reasonable reflection more possible is the unilateral nuclear disarmament of Great Britain. The balance of power between America and Russia [...] does not depend upon our adherence. These two powers can sufficiently terrify each other without our help. Our task is a different one, and it is especially *ours*, since we are the people in the world who combine to the highest degree the ability to reflect and the ability to act impressively and effectively. We have a tradition of free and independent thinking, we can control our leaders democratically, and we are not paralysed by the responsibilities of supreme power. It is our duty to take the lead in unilateral disarmament. [...] It is our duty in Great Britain to take the initiative; and if we fail it will be, it seems to me, one of our greatest moral failures as a nation.

(斜体は原文のまま、下線は筆者による；Murdoch, 'Bomb' 5)

まず、このエッセイにおいてはこれまでとは異なり、マードックがある特定の政治的主義（共産主義、社会主義など）の立場に立っていないことを指摘したい。次に、マードックのイギリスへのひじょうに堅固な愛着と信頼は興味深い。まるで大英帝国の威信が忘れられないかのように、彼女は冷戦下においてなお、イギリスが他国を先導して世界平和を導く潜在力を持つ国家であると信じている。旧植民地が次々と独立し、自信を失っているイギリスにとって、マードックの論調は心を奮い立たせられる頼もしいものだったのではなかろうか。そしてもっとも重要なのは、第二次世界大戦以後の世界における特有の現象として、道徳と政治が切り離せないものになったというマードックの指摘だ。この主張は同性愛の合法化に向けて揺れる社会に対して出した同性愛擁護の声明ともとれるエッセイ、「同性愛に関する道徳的判断（'The Moral Decision about Homosexuality'）」（1964）でも繰り返されている。

イギリスでは1967年の性犯罪法によって、同意のある21歳以上の男性成人間の私的な同性愛行為が非犯罪化した。この法改正への最初の大きな一歩となったのは、1957年に提出されたウォルフエンデン報告書（the Wolfenden Report）であった。児玉聡によれば、この報告書は出版後数時間で初版の5000部がすべて売り切れるほど世間の注目を集めた（児玉 182）。多くの人がこの報告書を買求めた後には多くの議論が交わされたであろうことを思えば、マードックの小説家としての活動の初期は、社会において同性愛に関する議論がさかんになされていたころと推察できる。そのような空気の中で執筆されたエッセイ、「同性愛に関する道徳的判断」の冒頭で、マードックはこう述べている。

I wish to argue that the problem of homosexuality is fundamentally a moral problem which the whole community ought to face, and that the facts we need in order to make a judgment about it are quite ordinary facts which are accessible to the observation of ordinary people.

(Murdoch, 'Homosexuality' 3)

ここでもまた、同性愛を合法化するか否かという議論においてマードックが問題にするのは道徳の間

題だ。エッセイの最後で改めてこのことが繰り返されている。

The law must be changed, that goes without saying. But what else can be done to produce a sane and decent attitude to this matter? It is unfortunate that many well-meaning people, who rightly say that we need more information, are still treating homosexuality as a social ailment which 'scientific facts' will help to cure. But if there is illness here it is our society at large that is ill, in the sense of prejudiced or morally blind. The facts which will cure this prejudice belong to the ordinary talk of ordinary people, and should gradually become more accessible if those who know about homosexuality will refer to it sensibly, and as homosexuals gradually emerge from the demoralising secrecy which is at present forced upon them. [...] What is needed is not more science but just more humane and charitable recognition of our right to differ from one another. (下線は筆者による：Murdoch, 'Homosexuality' 6)

個人が自由に個性を発揮して生きる社会が求められており、そしてそうした社会を築いていく力は草の根の力であるという結論が、やはりここでも提示されている。

戦争中には社会で大きな影響力をふるっていた特定の主義^{イイズム}を信奉したマードックだが、戦後になるとそうした思想のグループには属さなくなっている点は興味深い。「イギリスにおける社会主義運動は勢いをなくしてしまっている。これは社会全体にかかわる不幸な事態だ」(Murdoch, 'House' 17) —マードックは1959年に発表したエッセイ、「理論の家 ('A House of Theory')」の冒頭でこう述べた。マードックによれば、「人間の平等を希求する心、つまりもっとも貧しき者をもっとも富める者と等しく尊ばんとする」(Murdoch, 'House' 17) 道徳的エネルギーが、イギリスにおける社会主義運動を育ててきた。しかし労働者階級の運動や福祉国家の樹立、戦後の経済復興のおかげで、イギリスには以前ほどあからさまな格差はなくなり、平等な社会を志向する人々のヴィジョンはすっかり鈍ってしまった (Murdoch, 'House' 18)。本当に格差がなくなったのであればよいが、そうではない。スキルと創造力を持つ少数者と、持たない多数者の間の溝はいまだ大きい (Murdoch, 'House' 29)。そしてそこには、キリスト教にも、その代替えの信念としての政治意識にも信頼を失った、道徳律も共同体意識を持たない、孤立した人々 ('a deracinate, disinherited and excluded mass of people') が残ってしまったのである (Murdoch 'House' 29)。このような様相を呈している現代社会において大きく育ちつつある隙間 ('void') の危険性にマードックは警鐘を鳴らしている。

There is a serious and growing void in our thinking about moral and social problems. This void is uneasily felt by society at large and is the more distressing since we are now perhaps for the first time in our history feeling the loss of religion as a consolation and guide; until recently various substitutes (Socialism itself, later Communism, Pacifism, Internationalism) were available; now there seems to be a shortage even of substitutes. (Murdoch, 'House' 26)

道徳と政治が分ちがたく結びついている戦後世界において、人々がその両方を失っている現状に、マードックは危機感をもっているのだ。

当初は労働クラブへ、共産党へ、ベルギーへオーストリアへと、政治の実践のために彼女は外へ外へと向かっていた。しかしそうして得た経験を通して、彼女は自らの政治の実践のを内面化していったとは考えられないだろうか。「書く」というごく個人的な行為の中に、政治の場を移したとは考えられないだろうか。

3. 初期小説における政治性

本節では第2節で立てた仮説を考慮に入れながら、マードックの初期小説を検証したい。

1) 『網のなか』(1954)

マードック最初の小説となる『網のなか』の語り手ジェイクは、30歳を少し過ぎた小説家志望の物書きである。定職についていない彼には定収入がなく、住居は居候を許す知人頼みだ。銀行には約70ポンドの預金があるとジェイクは述べているが(Murdoch, *Under 20*)、これは現代に換算すればおよそ1670ポンド、20万円程度に過ぎず⁷、成人男性一人が生活を立てていくにあたってとても十分な預金高とは言えない。それにもかかわらず、彼からは悲壮感が全く感じられない。彼の周りの人間を見ても、召使のようにジェイクの後をついてまわるフィン、もとタイピストの女優マッジ、哲学の学外指導を行うデイヴなど、安定職についている登場人物は少なく、そういう意味ではジェイクが持つボヘミア的な気質はこの小説の登場人物たちにある程度共通するものである。追い出されようが閉じ込められようが追い詰められようがほとんど危機感を感じない感覚の鈍い主人公。ジェイクが何より幸せを感じるのは、一銭にもならない夢のような思索の時間('time for [...] the sort of dreamy unlucrative reflection')であり、そのような時間を許された居候としての暮しを、彼は「殻の中のくるみのように心地よい」時間であったと表現する(Murdoch, *Under 10*)。浮遊するシャボン玉の中で自覚なく暮らしているようなジェイクだが、これがマードックが嘆く福祉国家の弊害なのだろうか。エッセイ「乾燥性を排して('Against Dryness')」(1961)の中で、マードックは「福祉国家経済は考えることに対するあるインセンティブを奪ってしまった」(Murdoch, 'Against' 18)、と嘆いている。

マードックはイギリスにおいて社会主義が育たなかったひとつの原因に福祉国家体制による表面上の格差緩和、感覚の鈍化を挙げていたが、ジェイクもやはり、中途半端な社会主義者である。新独立社会党を率いるレフティ・トッドはジェイクに関して「才能はあるが怠け者で仕事をしない男」、そして「左翼思想を持っているが政治に積極的に関与しない男」という2つの噂を聞いているが、その両方が正しい情報であることをジェイク自身が認めている(Murdoch, *Under 96-97*)。しかし、レフティ・トッドとの教理問答のようなやりとりを通してジェイクが彼の政治に対する思いを訥々と語り出すとき、読者は初めて、深く考えること、真面目に生きることを放棄しているようなジェイクが、かつては青年共産同盟(Young Communist League; Y.C.L.)に属し、現在は労働党に属していること、

そして、社会主義に期待をよせつつも何を期待すればよいのかわからないために政治そのものについて考えることを放棄した状態にあることを知る (Murdoch, *Under* 98)。「イギリスの社会主義は申し分なく価値がある。だけどこれは社会主義じゃないんだ。これは福祉資本主義だ。資本主義の本当の災いには触れていないんだ。労働が過酷だということに」(Murdoch, *Under* 99)、といった言葉や、「イギリスの社会主義が息を吹き返して若返るよりもイギリスにとっていいことなんて望めないさ」(Murdoch, *Under* 100)、といった言葉を発するときのジェイクは、珍しく言葉に詰まっている。一見考えることを放棄した軽いだけの存在に見えるジェイクの内面には実は、政治を、政治への自らの参加を、渴望する姿が潜んでいるように思われる。レフティ・トッドはジェイクの煮え切らない発言を総括してこう言っている。

The trouble with you is you don't really believe in Socialist Possibility. [...] You call yourself a socialist, but you were brought up on Britannia rules the waves like the rest of them. You want to belong to a big show. That's why you're sorry you can't be a communist. But you can't be-and neither have you enough imagination to pull out the other thing. So you feel hopeless. What you need is flexibility, flexibility! (Murdoch, *Under* 101)

レフティ・トッドの言葉を聞いていると、ジェイクの後ろ向きな戸惑いは、1950年代の多くの知識人と部分的に重なっているように見えてくる。大田信良は、ダニエル・エルが論文「資本主義の文化的矛盾」に記した1950年代の文化状況をこうまとめている。

「外部の敵たる共産主義者」におびやかされつつも、そうかといって、共産主義とは異なる政治的な理想は見つからず、知識人は政治から逃走した。そうした「文化的知識人」が逃げ込んだのが、「絶望、アノミー、疎外」という文化的なテーマであった。(大田 330)

ジェイクもまた、イギリスの社会主義に違和感を覚えつつもそれに代わる理想が見つからず、政治から逃走した知識人の一人なのかもしれない。

2) その後

『網のなか』のジェイクに関してはほんの数ページではあるが、彼の政治へのスタンスが小説内に描かれていた。しかしそれ以降の作品ではどうだろうか。たとえば第3作『砂の城 (*The Sandcastle*)』(1957)の男性主人公ビルは、やはりジェイクと同様に労働党に籍を置いている。しかも、ビルの場合は講演活動をしたり国会議員選挙への出馬を考えたりと、ジェイクとは異なり労働党の中でも中心的な位置にいる。しかしながら、彼の政治思想が具体的に描かれることはなく、彼がなぜ労働党にいるのか、国会議員になって何がしたいのかといった彼の政治的なヴィジョンは浮かび上がってこない。そして、自身の政治活動に理解を示さない妻との生活に疲弊するビルであるが、不倫相手

に選ぶ女性画家には自身の政治活動について全く語らない。自分の熱情を他者に伝えることができない孤独な魂の持ち主であるからこそ慰めのための愛を求めたのだろうか。あるいは政治への熱情そのものが、実は既に失われた熱情なのだろうか。いずれにせよ恋人レインはその名の通り、彼の生活に一時的な潤いをもたらしたが、物語全体の中では、一時的な通り雨にすぎなかった。小説『砂の城』において、ビルの政治活動にどのような意味があるのかは、少なくともテキストの表面からだけではなかなか見えてこない。このように、政治が物語のバックドロップに過ぎないようにみえる作品は、その後も生み出されていく。しかし、そのような作品ばかりともいえない。

作品の順序としては前後するが、第2作『魅惑者から逃れて (*The Flight from the Enchanter*)』(1956)は、マードックの作品の政治性を考える上では興味深い。この物語には東欧からの不法移民が4人も登場している。マードックの UNRRA での活動経験を知っている読者は、いかに共感をもって彼らが描かれているかと期待することと思う。しかし、彼らの描写は決して一筋縄で理解できるものではないのである。特に、年老いた盲目の母親とともに不法移民としてイギリスに入国し、ロンドンの片隅にある工場で働く美しいルシヴィッチ兄弟は際立って不気味な存在だ。母親は有名なフェミニズム運動家であったが自分自身は政治には関心がないと自覚する孤独な中年独身女性ローザは、ふとしたきっかけからこの兄弟に英語を教え、庇護し、生活を守るようになる。しかし弱者を守っていたはずのローザは徐々に彼らの性の奴隷と化し、主従が入れ替わっていく。この物語において、不法移民の兄弟はたしかに戦争という巨大な悪の犠牲者であるが、同時に、ローザの心の隙間 ('void') につけこんで彼女の心を支配していく得体のしれない危険な外来者でもある。小説には不法移民問題が国会で取り上げられるシーンもある。その後内務省から出頭要請を受け、将来を悲観して自殺する不法移民の若い女性、ニーナは、戦争が生みうる理不尽な悲運を体現する存在として印象深い。しかしこの悲劇的に孤独なニーナよりもはるかに強い存在感を、ルシヴィッチ兄弟は発揮しているように思われる。戦争の犠牲者を単純に弱者として片付けない点、国会における不法移民争議の一例として片付けない点に、マードックの小説ならでの政治性なり面白さなりがあるのではないだろうか。故郷を失い、すべてを失い、巨大な隙間 ('void') となった彼らにとって、その後の人生に道徳を取り戻すことは簡単なことではないのだ。

そして、いつしかルシヴィッチ兄弟に隷属してしまうローザや、この小説に登場する学校をやめて自由に生きる少女アネットは、ジェイクに通じる地に足のつかない生活ぶりや、考える力の弱さを持つ。だからこそ、カリスマ的な存在に、傾倒し毘にはまってしまうのだ。マードックは小説という舞台を、特定の政治的課題を議論する場ではなく、信じるべき宗教も政党も道徳律も持たない戦後の多くの人間がいかに「正しく」、あるいは「善く」生きるかという、もう一步抽象的な、道徳の問題の解決の場に充てている。「政治」はたしかに描かれていないかもしれない。しかし、政治と道徳が切り離せないものになった原爆後の世界において、政治を考えるにあたってははずせないのが道徳の問題なのだ。そう考えるのであれば、この小説もまた、政治の問題と分かちがたく結びついているといえるのではないだろうか。

マードックの死後には9.11やそれに続くイラク戦争、そして多くのテロや事件が起きた。どので

きごとを考えるにあたって、政治と道徳を切り離すことはできない。そして、マードックが次々と描き出した不気味に現実感を欠く世界—『鐘 (The Bell)』(1958)における世俗修道会、『ユニコーン (The Unicorn)』(1963)におけるとらわれの空間—。これらはどれも、その世界でのみ通用する規律と常識と道徳に律された世界であった。そう考えると、その非現実性こそが得体のしれない現実性を帯びて、今日私たちが目にする多くの事件と重なってくる。

4. 結論—日本におけるマードック再読の可能性

日本に本格的に英文学研究が根差したのは1950年代だった(安西187-88)。冷戦期のこの頃、アメリカの文化政策により「大きな社会変革への欲望を消し去り、現存する制度の安定化をもたらす」(大田324)ような非政治的な文学が多く出回り、さかんに読まれた。もともと政治教育の伝統が弱く、政治意識が弱い日本人にとっては⁸、ひじょうに知的でありながらあからさまな政治性は認められず、そしてスリルやミステリーの要素もふんだんに盛り込まれたマードックの作品は、読みがいのある魅力的な小説だったに違いない。国際マードック学会にせよ日本のマードック学会にせよ、マードックの名前を冠する学会のひとつの特徴として、会員が研究者だけではないという点が挙げられる。マードックは研究者だけでなく、広く物語が好きの人々をその読者としてきた卓越したストーリーテラーなのだ。その点でマードックをブロンテやディケンズと並び称する批評は初期から多く存在したことは、ニック・ターナーも認めている(Turner 56)。

日本において、そしてイギリスにおいて、マードックの人气が急激に下降したのは、ちょうど冷戦が終結したころと重なるのも興味深い。冷戦期に意図的に封印された小説における政治論が文学研究の世界に再び解き放たれた時、人々がより明確な政治性を小説に求めるようになったということはないだろうか。しかし、もしそうであるとしたらならば、冷戦終結から30年を経た今、マードックを再読してみることに意味があるだろう。なぜなら、マードックは決して、政治意識の乏しい作家ではなかったからだ。

「マードックの小説における政治的含蓄にアクセスするためには、批評家はテキストの余白に集中する必要がある。政治的側面は作家自身によって展開されるのではなく、読者にゆだねられているのだから」(Rowe and Upstone 65)、とアン・ロウとサラ・アプストウンは述べている。なぜ明快な意見を持つマードックが議論の展開を読者にゆだねるのか。それはおそらく、マードックにとっての作家の仕事が、分野は違えどレフティ・トッドと同じであったからだ。「人々は私たちを無責任だと言って攻め立てる。しかし彼らはわかっているんだよ。私たちの役割はイギリスにおける社会主義の意識に探りを入れていただけなんだ」(Murdoch, *Under* 100)、とレフティ・トッドが言うように、マードックは芸術家として、自らの作品をプロパガンダ、あるいは教訓とするのではなく、読者とともに、意識を探求する場としたかったのではないだろうか。個人個人が自分の意志と力できちんと考えることで草の根の道徳が育っていく。マードックはおそらく、刺激的な物語を書くことで、その手助けをしてきたのではないだろうか。左翼思想への傾倒から始まったマードックの政治観が、サッチャー時代に右翼に傾いたこと(Purton 177)はよく批判されるが、福祉国家体制に甘えない個人主義への移

行に、マードックはひきつけられたのかもしれない。

【謝辞】

本論文は2019年度青山学院大学経営学会研究助成金を受けた研究の成果の一部として執筆いたしました。ここに御礼申し上げます。

【注】

- 1 「怒れる若者たち」については楠田に詳しい。
- 2 キングストン大学のアイリス・マードック・アーカイヴ・ウェブサイトにも次のような記述が見受けられる。‘The last decade [...] witnessed a renaissance in Murdoch scholarship worldwide, largely due to a revival of the relationship between ethics and literature as an aspect of contemporary philosophical and literary debate’. (このサイトは2014年以降更新されていないため、ここでいう‘the last decade’とはだいたい1995年からの10年間を指すと考えられる。)
- 3 他の原因としては、マードックの作品に多用されるスリラーやサスペンスといった大衆文学的な要素が大衆的な人気の確立に貢献すると同時に真面目な読者を遠ざけたこと、彼女が固執したりアリズム小説の手法が、ポストモダニズム全盛の時代の中で人々の目に時代遅れなものに映るようになったこと、注目に値するような小説における新しい展開は、イギリス国内であればレズビアンや女性、労働者階級といった周縁からの視点で描かれた小説、国外であればアメリカや旧植民地から発せられる小説であるというコンセンサスが生まれていく中で、オックスフォードとウエスト・ロンドンに根差した、教育にもお金にも困らない中産階級の物語を中心に描き続けたマードックの作品が色あせて見えたこと、などが挙げられている。また、マードックの死後に夫ジョン・ベイリー (John Bayley, 1925-2015) が立て続けに出版したセンチメンタルな回想録やそれをもとに製作された映画『アイリス』の公開、複数の伝記の出版により、マードックが作品よりもアルツハイマーに侵された悲劇の知識人という点で人々に記憶されてしまったことも、彼女の小説が重視されなくなったひとつの要因として挙げられている (49-56)。マードックが意識的に政治を文学の中に取り込まなかったことは、ゲリー・ブラウニングやアン・ロウ、サラ・アプストウンも指摘している。
- 4 日本の戦後英文学研究における政治議論排除の傾向については大道に詳しい。
- 5 マードックの伝記的事実についてはコンラディ、パートンを参照した。
- 6 第二次世界大戦時の徴兵は1939年4月、20歳から22歳までの男子から始まる。6か月の軍事訓練を受けることが義務付けられた (Purton 13)。また、やがて第二次世界大戦において、イギリス軍の特殊作戦執行部 (SOE) の一員として、イギリス軍とブルガリアにおける反ファシストのパルチザンたちとの連絡係の任を請け負い、ブルガリアで銃殺されることになるフランク・トンプソン (Frank Thompson, 1920-1944) と出会い、共産党に招き入れたのもこの頃である。
- 7 1955年における70ポンドの価値が2017年現在においておよそ1,670.58ポンドであることは、ナショナル・アーカイヴが提供するオンラインの通貨換算サイト、‘Currency Converter: 1270-2017’ を使って試算した (2019年10月1日アクセス)。
- 8 日本人の政治意識の弱さについては大道に詳しい。

【文献】

- 安西徹雄「あとがき」『日本のシェイクスピア100年』安西徹雄編、荒竹出版、1989年、187-88頁。
- 大田信良「ベケット、ナボコフ、そして文化冷戦—『モダニズム文学』の制度化」『愛と戦いのイギリス文化史—1951-2010年』川端康雄、大貫隆史、河野真太郎、佐藤元状、秦邦夫編、慶應義塾大学出版会、2011年、319-33頁。
- 大道千穂「あるびよん・くらぶ再評価—『あるびよん—英文化総合誌』から再考する戦後日本の英文学」『ヴァージニア・ウルフ研究』第36号 (2019年) : 79-98頁。
- 楠田真「『怒れる若者たち』再考」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』12 (2011年) : 233-44頁。
- 児玉聡「ハート・デブリン論考再考」『社会と倫理』24 (2010年) : 181-91頁。

- 平井杏子「あとがき」『アイリス・マードックを読む—全作品ガイド』日本アイリス・マードック学会編、彩流社、2008年、253-55頁。
- Browning, Gary. *Why Iris Murdoch Matters: Making Sense of Experience in Modern Times*. London: Bloomsbury, 2018.
- Conradi, Peter J. *Iris Murdoch: A Life*. London: HarperCollins, 2001.
- Murdoch, Iris. 'Against Dryness'. *Encounter* (January 1961): 16-20.
- . *The Bell*. 1958. Harmondsworth: Penguin, 1962.
- . *The Flight from the Enchanter*. 1957. Harmondsworth: Penguin, 1984.
- . 'A House of Theory'. *Partisan Review* 26 (1959): 17-31.
- . 'How I would Govern the Country'. *Badminton School* 67 (Spring and Summer Terms 1935): 56-57. Rpt. in Muroya and Hullah 6-8.
- . 'If I were Foreign Secretary'. *Badminton School* 71 (Autumn Term 1936): 36-38. Rpt. in Muroya and Hullah 8-9.
- . 'The Moral Decision about Homosexuality'. *Men and Society* 7 (Summer 1964): 3-6.
- . 'Morality and the Bomb'. *Women Ask Why: An Intelligent Woman's Guide to Nuclear Disarmament*. Essex: Quick, 1962. 1-6.
- . *The Sandcastle*. 1957. Harmondsworth: Penguin, 1960.
- . *Under the Net*. 1954. Harmondsworth: Penguin, 1960.
- . *The Unicorn*. 1963. Harmondsworth: Penguin, 1966.
- Muroya, Yozo, and Paul Hullah, eds. *Occasional Essays by Iris Murdoch*. Okayama: U Education P, 1998.
- Purton, Valerie. *An Iris Murdoch Chronology*. Author Chronologies Series. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007.
- Rowe, Anne and Sara Upstone. 'Iris Murdoch, Ian McEwan and the Place of the Political in Contemporary Fiction'. *Iris Murdoch: Texts and Contexts*. Ed. Anne Rowe and Avril Horner. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012. 59-73.
- Sierz, Aleks. 'Alan Sillitoe: Who are you Calling Angry?'. *The Telegraph* 26 Apr. 2010.
- Turner, Nick. *Post-War British Women Novelists and the Canon*. Continuum Literary Studies Series. London: Continuum, 2010.